

断り表現を構成する発話の順序
——ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語・タイ
語を勧誘場面で比較して——

伊藤 恵美子

The Order of Utterances in Invitation
Refusals:
A Comparison of Invitation Refusals in
Javanese, Indonesian, Malaysian, and Thai
ITO Emiko

This paper aims to examine refusals to invitations by Javanese, Indonesian, Malaysian, and Thai native speakers from the perspective of the order of utterances. The data, analyzed according to DCT (Discourse Completion Test), were collected from 184 informants: 33 Javanese native speakers, 33 Indonesian native speakers, 68 Malaysian native speakers, and 50 Thai native speakers. DCT consists of three variables: the interlocutor's status (superior / equal), the informants' relationship with the interlocutor (familiar / unfamiliar), and informants' native language (Javanese / Indonesian / Malaysian / Thai). Based on an analysis of the data according to semantic formulas, the results indicated that negative politeness strategies are favored in languages which have an honorific system, while positive politeness strategies are more likely to be used by speakers of languages which do not have an honorific system.

キーワード： 勧誘に対する断り、発話の順序、ポライトネス・ストラテジー、敬語

はじめに

言語文化における国家は、どの程度の重みがある要素なのであろうか。インドネシア人とマレーシア人は互いに隣国の言葉が理解できると言われ

ているほど、インドネシア語とマレーシア語の隔たりは小さい。ところが、Hofstedeの文化理論では、国家と社会は等しくないなので、厳密に言えば人々に共通する文化概念は国家より社会に当てはまるが、国家は国民のメンタル・プログラム (mental program) のかなりの部分の源であると説明される (Hofstede1991, p. 12) メンタル・プログラムとは、一般的には (広義の) 「文化 (culture)」と呼ばれているものである (Hofstede1991, p. 4)。

1990年代後半より、筆者は為政者によりインドネシア語、あるいはマレーシア語と呼ばれているマレー語をポライトネスの観点から調査・分析を続けている (ポライトネスに関しては第1章第3節で説明する)。筆者は留学生の日本語教育に携わっており、研究の原点は日本で勉学している外国人留学生と日本人とのコミュニケーション障害を解決する方策を探りたいと思ったことである。この教育現場の問題意識から、留学生の母語の社会文化的規範が表出するとされている言語文化の比較を行っている。本稿は一連の研究成果に基づき (伊藤 2001a; 2001b; 2002a; 2002b; 2003a; 2003b; 2004a; 2004b; 2004c; 2004d; 2005a; 2005b; 2005c; 2008 など)、対象国にタイ王国 (以下、タイとする) を加え、ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語・タイ語を勧誘に対する断り表現を中心に比較検討を行う。本稿が語族の異なるタイ語を分析対象に加えたのは、言語系統が異なる言語においても敬語体系の有無がポライトネス・ストラテジーに関与するかどうかを明らかにするためである (ポライトネス・ストラテジーに関しても第1章第3節で述べる)。また、言語文化における国家と社会についてもインドネシア語とマレーシア語で考えてみたい。

1. 分析の枠組みと研究目的

1-1 マレー語・ジャワ語・タイ語の特徴

マレー語 (Bahasa Melayu) は、現在インドネシア共和国・マレーシア連邦・シンガポール共和国・ブルネイ王国の国語 (Bahasa Negara: 国家語) に制定され、ビジネスと政府部門だけでなくマスメディアや教育言語として2億2000万人以上の人々にコミュニケーション手段として使用されてい

る(崎山 1974; 正保 1998)。前世紀中葉にそれぞれの地域が宗主国から独立するに際して、シンガポール共和国とブルネイ王国ではマレー語で変わらないが、国家統合の観点からインドネシア共和国ではインドネシア語(Bahasa Indonesia)、マレーシア連邦ではマレーシア語(Bahasa Malaysia)と呼称を変える。

マレー語はオーストロネシア(Austronesia)語族¹⁾に属する。オーストロネシア語族は単一の語族を構成し、ほぼ5000~7000年前に存在した祖語の系統を引く(ベルウッド 1989、144頁)。古代において、オーストロネシア語とタイ語に結びつきがあったとする説もあるが、多数の支持は得ていない(ベルウッド 1989、149頁)。現代マレー語の特徴として、まず文字にアルファベットを用いるので、表記をそのまま読めばよいし、アクセントは意味の弁別に関与しないし、声調もないので、発音が比較的易しいと言われている。マレー語には動詞・形容詞の活用も時制もなく、名詞の格変化、単数形と複数形の区別も存在しないので、必然的に文脈依存度の高い言語と捉えられる。また、マレー語はリンガフランカ(*lingua franca*)であり、体系としての敬語を持たない。

インドネシア共和国(以下、インドネシアとする)は、オランダの植民地下にあった地域が第二次世界大戦後に独立して誕生した多民族・多言語国家である²⁾。インドネシアの国語は1945年憲法第36条でインドネシア語と法定されたものの、インドネシア語を導入するために小学校ではアチェ語・バタク語・スンダ語・ジャワ語・マドゥラ語・バリ語・マカッサル語・ブギス語の8言語が媒介言語として使われており(亀井・河野・千野 1995、712-717頁)、インドネシア語母語話者は多数派ではない。インドネシア語は言語政策として、端的に言えばインドネシア共和国の国家統一のために、総人口の約65%が使用しているジャワ語ではなく東南アジア島嶼世界のリンガフランカであるマレー語を敢えて国語として採用・形成された経緯がある。つまり、マレー語が国語に採択された理由の第一として、マレー語がどの種族の言語でもない点が挙げられる。使用人口の多いジャワ語を国語に採用するとジャワ人に有利となるので、国民の公平を考慮した結果である。第二の理由は、当時のインドネシアのほぼ全域でマレー語

が理解されていたという背景である。(クルマス 1987、309-326頁; 1993、267-272頁; 亀井・河野・千野 1995、712-717頁; 舟田 1997、78-90頁)。インドネシア語の語彙には宗主国の影響によるオランダ語のほか、ジャワ語・英語から外来語が相当数入っている(クルマス 1987、113頁)。

マレーシア連邦(以下、マレーシアとする)では、マレー語は1957年の半島部独立以来国語になっていたが名目的なものに過ぎず、実質的な地位を確立したのは5.13事件後である³⁾。この事件を契機として、教育言語がマレー語に制定され、1970年頃から国語の名称がマレー語からマレーシア語に変更され、70年代から教科書や教育省の用語はマレーシア語に統一された(亀井・河野・千野 1992、189-192頁)。つまり、名称として1957年から1969年5月13日までは「マレー語」を使用し、以降1972年までは「マレーシア語」を使用していた。マレー語はマレー系マレーシア人の言語というイメージで受けとめられる傾向があり、マレーシア語のほうが華人やインド系を含むすべてのマレーシア国民の言葉=国語としての立場をはっきり示せる、と政府は考えたものと見られる(小野沢 1997; 鳥居 1998)。近年、マレー語を語源としており、マレーシアで作られた言語ではないので、本来の「マレー語」に直すべきという意見が多い。マレーシア語、マレー語を明確に区別する規定はない。憲法の中では「マレー語」、1995年の新教育法は初等教育教科書では「マレーシア語」を正式な用語とし、下等中学、上等中学、大学の教科書および言語専門家は「マレー語」、非マレー系住民は「マレーシア語」を使用している(小野沢 1997、188-191頁)。マレーシア語は語彙の拡充に際して、アラビア語に頼る傾向がある(クルマス 1987、324頁)。

ジャワ語はマレー語と同じオーストロネシア語族の言語であるが、古ジャワ語を継承して、非常に長い文化的伝統を持ち、宮廷を中心とするジャワ文化を反映する複雑な敬語体系があり(亀井・河野・千野 1989、209-212頁)、話し手と聞き手の地位や年齢など相対的關係によって用いられる言葉の階層の程度、すなわち高度か低度かが決められる(崎山 1974、96頁)。前述のように、国語に選ばれたマレー語より、インドネシア国内ではジャワ語話者のほうが多い。

断り表現を構成する発話の順序

タイ語はシナ・チベット語族のシナ・タイ語派に属し、その三大特徴は(1)単音節的で、(2)声調があり、(3)孤立語であること、である(冨田1990、3頁)。孤立語とは単語の語形が常に一定で動詞は活用せず、性・数・格・人称・時制を示す標識がない言語である(赤木1989、164頁)。また、タイ語は表記にアルファベットや漢字を用いず、サンスクリット系の文字から変化したと考えられているタイ文字を使用する(綾部、1982、102頁)。敬語については、僧侶に対しては「僧語」が、王族に対しては「王語」が使用されている(赤木1989、169-171頁)。王語は国王に対する使用、王族に対する使用から、次第に範囲が広がり丁寧語としても使われるようになってきたので、元来の王語は狭義の王語、現在の王語は広い意味の王語と呼ぶことができよう(堀江・宇佐美1996、56頁)。

1-2 先行研究の概観

本稿は複数の言語文化を発話行為の観点から検討する比較文化語用論(cross-cultural pragmatics)に属す。比較文化語用論の先駆的な研究としては、Blum-Kulka and Olshtain (1984)がオーストラリア英語・アメリカ英語・イギリス英語・カナダ仏語・デンマーク語・ドイツ語・ヘブライ語・ロシア語の8言語を比較したCCSARP (Requests and Apologies: A Cross-Cultural Study of Speech Act Realization Patterns)が挙げられる。アジアの言語を対象とした先行研究としては、Blum-Kulka and Olshtain (1984)の枠組みを用いて印欧語(英語・ドイツ語・ポルトガル語・ブルガリア語)と東洋系言語(日本語・中国語・韓国語・タイ語・インドネシア語)の依頼行為を比較した橋元(1992)、マレーシア語・中国語・インドネシア語・ピジン語・インドネシア語・韓国語が母語の留学生の談話行動上の問題点を明らかにした熊井(1992)のほか、日本人学習者の英語を日本語と英語の母語話者とで比較したBeebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990)が著名である。留学生等母語話者による研究には、タイ語と日本語の依頼行為を考察した堀江(1995)、断り行為の分析に計量的手段を用いた元(2003)、日本語と韓国語の断り談話におけるストラテジーを分析した任(2004)、タイ語と日本語の断り行為を比較したルンティエラ(2004)などがある。マ

レーシア語・インドネシア語・ジャワ語については前述のように一連の伊藤の先行研究がある。

次に、本稿が検討する言語を分析対象とした主立った先行研究について述べる⁴⁾。橋元(1992)は分析の結果、日本語・インドネシア語・韓国語では社会的地位の高低により、英語・ドイツ語・中国語では親疎によりストラテジーの使い分けが行われやすい傾向が見出された。タイ語については、代替案の提示は社会的地位の高低によって、規則の陳述は親疎によりストラテジーの使い分けが行われやすいようであるが、他の言語のように判然としない。堀江(1995)はタイ語と日本語の依頼表現を考察し、両言語の文型とスタイルはかなり違いがあり、それはそれぞれの言語の背景にある社会・文化・価値観の影響を受けていると分析している。ルンティエラ(2004)は、Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz(1990)を参考に調査を行い、日本語もタイ語も断り行為の全てに理由が出現すること、日本人は相手が目上かどうかを、タイ人は相手との親疎関係を考慮して表現を選択することを見出している。伊藤(2004c)は依頼に対する断り行為を発話の順序の観点から見て、インドネシア語はポジティブ・ポライトネス、日本語とジャワ語はネガティブ・ポライトネスの傾向が強い言語であると分析している。同じく依頼に対する断り行為において断らなかった返答の観点から調査した伊藤(2005c)は、ポライトネス・ストラテジーと敬語体系の有無との関係から考察し、敬語のない言語はポジティブ・ポライトネス、敬語のある言語はネガティブ・ポライトネスの傾向が強いことを確認した。勧誘に対する断り行為を発話の順序の観点から行っている考察は、マレーシア語と日本語を比較した伊藤(2002b)、ジャワ語・インドネシア語・日本語を比較した伊藤(2005a)、ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語を比較した伊藤(2005b)へと対象言語を広げつつ分析の精緻化を進めており、伊藤(2005b)はジャワ語とインドネシア語はネガティブ・ポライトネス、マレーシア語はポジティブ・ポライトネスを志向する傾向が窺えるとしている。

1-3 理論的背景

本稿は Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論 (politeness theory) に立脚する。“politeness”はその概念が日本で紹介された初期には「丁寧さ」と訳した論文等も散見されたが、いわゆる敬語と区別するため、最近では片仮名表記が一般的である。ポライトネスは対人関係における調節機能であり、体系としての敬語の有無に関わらず人間の言語行動における普遍性を具えている (生田 1997)。また、広い範囲の対人配慮表現は待遇表現と呼ばれるので、ポライトネス研究は待遇表現研究の範疇にある (岡本 2006、67 頁)。

ポライトネス理論の中心概念は FTA (Face Threatening Act) である。人間には、他人に理解・称賛されたいポジティブ・フェイス (positive face) と、他人に邪魔されたくないネガティブ・フェイス (negative face) の二つのフェイスを保ちたい欲求があり⁵⁾、このフェイスを脅かすような行為を FTA と呼ぶ。ポジティブ・フェイスに働きかけるストラテジーをポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・フェイスを尊重するストラテジーをネガティブ・ポライトネスと言う。FTA は、話し手と聞き手の社会的距離と、話し手と聞き手の力関係と、相手にかかる負担の度合の和で表され、負担の度合は文化によって異なるとされている (Brown and Levinson 1987)。

1-4 研究目的

研究目的は、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論に基づき、話し手と聞き手の社会的距離を「親疎関係」として、話し手と聞き手の力関係を「地位」として、相手にかかる負担の度合をジャワ語・インドネシア語・マレーシア語・タイ語の「文化差」として、場面別の言語表現を比較することである。

本稿では前提発話行為は勧誘行為と限定しているので、調査項目のうち勧誘行為の場面を分析対象とする。Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990) などでは「高級レストランで賄賂を贈られる」「従業員から昇給を要求されている」等の職場の場面が提示されているが、これらの状況は調

表1 場面設定

場面	対話の相手	状況
1	担任の先生	パーティに誘われる
2	担当以外の先生 ⁶⁾	パーティに誘われる
3	親しい友達	散歩/トランプに誘われる
4	親しくない学生	散歩/トランプに誘われる

査対象者である大学生にとって現実的ではない。そこで、本稿は留学生の意見を参考にして性別に関係なく日常的に行われている行為として、表1に掲げたようにインドネシアとマレーシアでは対話の相手が目上の場合「パーティに誘われる」、対話の相手が目下の場合「散歩に誘われる」、タイでは対話の相手が目上の場合「パーティに誘われる」、対話の相手が目下の場合「トランプに誘われる」と、調査国の事情に合わせて状況を設定した。

2. 調査

2-1 調査対象者

調査は、インドネシア、マレーシア、およびタイで行った。回収した回答は、インドネシア人80名、マレーシア人80名、タイ人50名であった。回答のうち、調査紙のフェイス・シートの母語欄を参考に、インドネシアの調査ではジャワ語母語話者とインドネシア語母語話者、マレーシアの調

表2 回答の言語別内訳

対象者	母語	調査国	回答数(名)
インドネシア人	ジャワ語	インドネシア	33
インドネシア人	インドネシア語	インドネシア	33
マレーシア人	マレーシア語	マレーシア	68
タイ人	タイ語	タイ	50

査ではマレーシア語母語話者⁷⁾、タイの調査ではタイ語母語話者のみを有効回答とした。言語別の有効回答数の一覧表を表2に掲げる。

インドネシアで収集したデータからジャワ語とインドネシア語の母語話者を取り出して有効回答としたのは、前者が複雑な敬語体系を有するのに対して、後者は敬語がないことから(崎山1974)、両言語の母語話者の丁寧さに関する意識が異なると考えられることに因る。

2-2 調査時期

調査はインドネシアでは1999年8月下旬、マレーシアでは同年8月下旬から9月にかけて、タイでは2007年9月に実施した。

2-3 実施方法

調査は、インドネシア語・マレーシア語・タイ語の各言語に翻訳した調査紙を用いて行った。インドネシアの調査は、筆者がジャワ島中部にある国立ディポネゴロ大学(Universitas Diponegoro: UNDIP)を訪問し、アセアン学生協会の協力を得て、同大学の学生に対してインドネシア語版の調査紙を直接、配布・回収した。マレーシアの調査は、筆者がマラヤ大学の日本留学予備教育課程日本語科(Ambang Asuhan Jepun, Pusat Asasi Sains, Universiti Malaya)を訪問して調査を依頼し、1年次の在籍者全員に対してクラス担任が授業時間内にマレーシア語版の調査紙を配布・回収した。タイの調査は、筆者がタイ商工会議所大学(The University of the Thai Chamber of Commerce: UTCC)を訪問し、日本語学科の学生の協力を得て同大学の学生に実施した。

2-4 手続き

調査紙は談話完成テスト(Discourse Completion Test: DCT)⁸⁾とフェイス・シートから成る。DCTは場面設定と対話の相手の台詞と、その台詞に対する応えを書き入れる空白欄で構成されている。例1は日本語版DCTの《場面1》である。

[例1] 担任の先生がパーティに招待してくださいました。しかし、その日は友達の結婚式に出席します。

先生： 今週の土曜日に私の家でパーティをするので、よかったら来ませんか。

私： _____。

2-5 分析方法

まず、DCTはそれぞれの言語を母語とする留学生の意見を参考にして日本語に訳した。次に、発話内容を分析するに際し、DCTで得た発話から意味公式 (semantic formulas) を抽出してから、その意味公式を機能別に分類した。

意味公式は、Blum-Kulka and Olshtain (1984)、Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990)、生駒・志村 (1993) などで、発話の分析に使用されている意味的なまとまりの単位であり、「発話行為を分析する際の単位」と定義される (藤森 1994, 5 頁)。なお、意味公式は { } で表示する。本稿は、伊藤 (2004a) の分類に従って分類を行うこととする。これは、(1) 断り行為の代表的な先行研究である Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990) の分類、(2) Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990) を日本語の分析に導入した藤森 (1994) の分類、(3) 藤森 (1994) を修正してマレー語を分析した伊藤 (2004a) を踏まえている。表3に、発話の代表的な例とその意味公式を示す。

[例2] は、日本語版 DCT の《場面1》の回答例である。「今週の土曜日にパーティをするので、よかったら来ませんか」が、調査紙に印刷されている誘いである。この誘いに対して、ある調査対象者は「すみません。今週の土曜日は私の友達の結婚式に出席しなければならなくて、本当にすみません」と回答を記入した。回答は、「すみません」が詫び、「今週の土曜日は私の友達の結婚式に出席しなければならなくて」が理由、「本当にすみません」が詫びの意味機能を担っているため、3つの意味公式 {詫び} {理由} {詫び} に分類される。

断り表現を構成する発話の順序

表3 断り行為における意味公式の分類

意味公式	意味機能	例
{結論}	直接的な表現の断り	行けない / 無理です / できない
{理由}	相手の意向に添えない旨の表明	定期試験があるので
{詫び}	相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明	申し訳ありません / ごめんね / 勘弁して / おこらないで
{関係維持}	相手との関係を維持したい旨の消極的な働きかけ	次回は行きます / また今度ね / 次は出席します
{共感}	相手の意向に添いたい心情の表明	行きたいけど / 残念ですが / したくないことはないけど
{感謝}	相手の行為により恩恵を受けたことの表明	ありがとうございます / ありがたいんですが
{情報}	相手の発話内容を確認	今からですか / 何時から? / 明日まで?
{条件}	断りの留保	時間があれば行きます / レポートを書いてからやります
{承諾}	明確な承諾	行きます / やります / わかりました
{その他}	上記に該当しないもの	ちょっと… / あのう… / えーと

[例2] 担任の先生がパーティに招待してくださいました。しかし、その日は友達の結婚式に出席します。

先生: 今週の土曜日にパーティをするので、よかったら来ませんか。

私: すみません。今週の土曜日は私の友達の結婚式に出席しなければならなくて、本当にすみません。

3. 結果と考察

本稿は発話を意味公式として捉え、その順序に注目して、ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語・タイ語の特徴を見出していく。四言語の異同を勧誘行為に対する返答のうち断り行為を中心に、対話の相手の地位

別、および対話の相手との親疎関係別で検討する。

先行研究が理論的には個人的な要因を認めてはいるものの、調査段階では「母語話者」という唯一の側面において調査対象者を設定しているところからわかるように (Blum-Kulka and Olshtain, 1984, pp. 198–199)、比較文化語用論は調査対象者の下位的な属性に強い関心を示す分野ではない。また、調査対象者の性差については、すでに多くの研究が論証しているように (Cowan, Drinkard and MacGavin, 1984; Instone, Major and Bunker, 1983 など)、一般的に、男性は女性より直接的な表現を用いること、対話の相手が女性よりも男性のほうがより直接的な言い方がなされることから (Takai, Cargile and Wiemann, 2000)、性差が重要な要因であることは否定しないが、本稿では議論の対象としない。

ポライトネス理論によれば、すべての発話行為が対話の相手にとって FTA となり得るが、断り行為は特に相手のフェイスを脅かすので (笹川 1994)、断りを行おうとする際に様々なストラテジーが必要となる (伊藤 2002b)。例えば、相手の意に添えない場合に話をどう終えようかと苦慮したことは誰しも経験あることであろう。対人関係の不均衡を修復しようとするなら、最後の一言に十分な配慮を要するからである。そこで、本稿は伊藤 (2002b; 2004b; 2005a; 2005b) を踏襲して、意味公式の順序だけでなく、一連の応答の最後に来る意味公式も検討の対象とする。また、意味公式の順序は各意味公式の組み合わせにより、いくつものパターンができるため、応答の順序が 100% 一致する組み合わせになる割合は必ずしも高くないことが報告されている (伊藤 2002b; 2004b)。この点を考慮して、ジャワ語・インドネシア語を日本語と比較した伊藤 (2005a) は、中間言語語用論の先行研究で使われている方法、すなわち意味公式の順序が 100% 一致する組み合わせの分析に加えて、最頻出の応答の順序に他の意味公式が付加したパターンも同時に検討を行っているので、本稿もこれに準じる。表中の () 内が、最頻出の応答の順序の後に他の意味公式が付加したパターンと、その割合である。ただし、応答の順序に同じパターンの回答がなければ、最頻出パターンもないので、この場合は一と表す。以下、場面ごとに、最頻出の応答の順序とその割合、最頻出の応答の順序の後に他の意味公式が付

断り表現を構成する発話の順序

加したパターンとその割合、応答の最後に来る最頻出の意味公式とその割合を、表4から表7に示す。

表4 目上の親しい相手《場面1》

母語	応答の順序	割合 (%)	応答の最後	割合 (%)
ジャワ語	-----	-----	{理由}	24.2
(ジャワ語	{詫び}{理由}・・・	36.4)		
インドネシア語	-----	-----	{理由}	21.2
(インドネシア語	{詫び}{理由}・・・	18.2)		
マレーシア語	{詫び}{理由}	14.7	{理由}	26.4
(マレーシア語	{詫び}{理由}・・・	45.6)		
タイ語	{理由}{詫び}	14.0	{理由}	30.0
(タイ語	{理由}{詫び}・・・	4.0)		

表5 目上の疎遠な相手《場面2》

母語	応答の順序	割合 (%)	応答の最後	割合 (%)
ジャワ語	{詫び}{理由}	9.1	{理由}	30.3
(ジャワ語	{詫び}{理由}・・・	15.2)		
インドネシア語	{詫び}{理由}	6.1	{詫び}	21.2
(インドネシア語	{詫び}{理由}・・・	30.3)		
マレーシア語	{詫び}{理由}	11.8	{理由}	27.9
(マレーシア語	{詫び}{理由}・・・	27.9)		
タイ語	{理由}{詫び}	8.0	{理由}	52.0
(タイ語	-----	-----)		

表6 同等の親しい相手《場面3》

母語	応答の順序	割合 (%)	応答の最後	割合 (%)
ジャワ語	{詫び}{理由}	18.2	{理由}	51.5
(ジャワ語	{詫び}{理由}・・・	39.4)		
インドネシア語	{詫び}{理由}	18.2	{理由}	45.5
(インドネシア語	{詫び}{理由}・・・	30.3)		
マレーシア語	{詫び}{理由}{理由} {関係維持}	22.1	{関係維持}	52.9
(マレーシア語	{詫び}{理由}・・・	50.0)		
タイ語	{結論}{理由}	24.0	{理由}	54.0
(タイ語	{結論}{理由}・・・	6.0)		

表7 同等の疎遠な相手《場面4》

母語	応答の順序	割合 (%)	応答の最後	割合 (%)
ジャワ語	{詫び}{理由}	21.2	{理由}	51.5
(ジャワ語	{詫び}{理由}・・・	24.2)		
インドネシア語	{詫び}{理由}	9.1	{理由}	39.4
(インドネシア語	{詫び}{理由}・・・	27.3)		
マレーシア語	{詫び}{理由}{理由}	23.5	{理由}	42.6
(マレーシア語	{詫び}{理由}・・・	51.5)		
タイ語	{結論}{理由}	32.0	{理由}	52.0
(タイ語	{結論}{理由}・・・	4.0)		

まず、表4から表7を概観すると、ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語では全場面に共通して、応答の順序の第一に{詫び}が、第二に{理由}が来るパターンが顕著なことから、マレー文化圏における勧誘に対する断り行為は発話が{詫び}{理由}の順で始まることが特徴であると言える。

次に、《場面1》から《場面2》《場面3》《場面4》の特徴を検討する。

断り表現を構成する発話の順序

表4からわかるように、《場面1》目上の親しい相手に対する場合、応答の順序の最頻出パターンは、ジャワ語とインドネシア語は応答の順序が同じパターンの回答はなくバラエティに富んでいた。マレーシア語は{詫び}{理由}で、その割合は14.7%であった。タイ語は{理由}{詫び}で、その割合は14.0%であった。次に、最頻出の応答の順序に他の意味公式が付加したパターンを見ると、ジャワ語は36.4%、インドネシア語は18.2%、マレーシア語は45.6%、タイ語は4.0%であった。最頻出パターンと、その後に他の意味公式が付加したパターンの割合を合わせると、ジャワ語とインドネシア語のポイントは変わらないのでそれぞれ36.4%、18.2%、マレーシア語は60.3%、タイ語は18.0%になる。応答の最後に来る意味公式は、ジャワ語もインドネシア語もマレーシア語もタイ語も{理由}で、言語間の差は見られない。

表5からわかるように、《場面2》目上の疎遠な相手に対する場合、応答の順序の最頻出パターンはジャワ語・インドネシア語・マレーシア語は共通して{詫び}{理由}であり、その割合はジャワ語は9.1%、インドネシア語は6.1%、マレーシア語は11.8%であった。他方、タイ語は《場面1》と同様に{理由}{詫び}で、その割合は8.0%であった。次に、最頻出の応答の順序に他の意味公式が付加したパターンを見ると、ジャワ語は15.2%、インドネシア語は30.3%、マレーシア語は27.9%、タイ語はなかった。最頻出パターンと、その後に他の意味公式が付加したパターンの割合を合わせると、ジャワ語は24.3%、インドネシア語は36.4%、マレーシア語は39.7%、タイ語は付加したパターンがないので8.0%である。応答の最後に来る意味公式は、ジャワ語とマレーシア語とタイ語は{理由}が最多であるが、インドネシア語では{詫び}であり、言語間に差が見られる。

表6からわかるように、《場面3》同等の親しい相手に対する場合、応答の順序の最頻出パターンはジャワ語・インドネシア語はともに{詫び}{理由}、マレーシア語は{詫び}{理由}{理由}{関係維持}、タイ語は{結論}{理由}である。最頻出パターンの割合はジャワ語とインドネシア語は各18.2%、マレーシア語で22.1%、タイ語は24.0%であった。次に、最頻出パターンの後に他の意味公式が付加したパターンを見ると、ジャワ語は39.4%、

インドネシア語は30.3%、マレーシア語は50.0%、タイ語は6.0%であった。最頻出パターンと、その後に他の意味公式が付加したパターンの割合を合わせると、ジャワ語は57.6%、インドネシア語は48.5%、マレーシア語は72.1%、タイ語は30.0%になり、その割合はインドネシア語では5割にわずかに届かないが、ジャワ語においては約6割、マレーシア語においては7割を超え、発話の典型的なパターンとなる。応答の最後に来る意味公式は、ジャワ語とインドネシアとタイ語は{理由}、マレーシア語では{関係維持}である。

表7からわかるように、《場面4》同等の疎遠な相手に対する場合、応答の順序の最頻出パターンはジャワ語とインドネシア語が{詫び}{理由}、マレーシア語で{詫び}{理由}{理由}、タイ語は《場面3》と同様に{結論}{理由}である。最頻出パターンの割合は、ジャワ語は21.2%、インドネシア語は9.1%、マレーシア語は23.5%、タイ語は32.0%と、その割合は同等の親しい相手に対する場合と大きい差はない。次に、最頻出パターンの後に他の意味公式が付加したパターンを見ると、ジャワ語は24.2%、インドネシア語は27.3%、マレーシア語は51.5%、タイ語は4.0%であった。最頻出パターンと、その後に他の意味公式が付加したパターンの割合を合わせると、ジャワ語で45.4%、インドネシア語で36.4%、マレーシア語で75.0%、タイ語は36.0%になり、同等の等しい相手に対する場合より概ねポイントはやや低いものの、目上の親しい相手に対する場合・目上の疎遠な相手に対する場合よりかなり高い。応答の最後に来る意味公式は、目上の親しい相手に対する場合と同様に、ジャワ語もインドネシア語もマレーシア語もタイ語も{理由}で、言語間の差は見られない。

最後に、4場面を包括して考察する。

応答の順序の最頻出パターンは、ジャワ語とインドネシア語は4場面すべて同じ結果であった。つまり、目上の親しい相手に対する場合は応答の順序は同じパターンの回答がなく、目上の疎遠な相手の場合・同等の親しい相手の場合・同等の疎遠な相手の場合はいずれも{詫び}{理由}であった。マレーシア語は、目上の親しい相手の場合・目上の疎遠な相手の場合は{詫び}{理由}、同等の親しい相手の場合は{詫び}{理由}{理由}{関係維

持)、同等の疎遠な相手の場合は {詫び} {理由} {理由} であった。タイ語は親疎関係に関わりなく、目上の相手の場合は {理由} {詫び}、同等の相手の場合は {結論} {理由} であった。

応答の最後に来る意味公式は、ジャワ語とタイ語はすべての相手に対して {理由} であり、インドネシア語は目上の疎遠な相手に対する {詫び} を除けば、目上の親しい相手・同等の親しい相手・同等の疎遠な相手に対して {理由} であった。マレーシア語は同等の親しい相手に対しては {関係維持}、目上の親しい相手・目上の疎遠な相手・同等の疎遠な相手に対しては {理由} であった。

第1章第3節で述べたように、ポライトネス理論では、人間には2種類の基本的な欲求、ポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスがあると説明される。前者は他人に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいというプラス方向への欲求であり、後者は他人に邪魔されたり、立ち入られたりしたくないというマイナス方向への欲求である(宇佐美 2002)。

ここで、{理由} {詫び} {関係維持} の意味機能を確認しておく。表3に示したように、{理由} は相手の意向に添えない旨の表明であり、{詫び} は相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明であり、{関係維持} は相手との関係を維持したい旨の消極的な働きかけである。この3つの意味公式をポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスに分けると、{理由} と {詫び} は相手にそれ以上立ち入られたくない気持ちが表れている意味内容なので、ネガティブ・ポライトネスの傾向を持つのに対して、{関係維持} は「消極的」であっても相手との関係を維持するために自ら働きかけて理解を得ようとする意味内容なので、ポジティブ・ポライトネスの傾向を持つ(伊藤 2005a)。

このポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの概念を念頭に置いて、次に応答の最後に来る意味公式をポライトネス・ストラテジーの観点から検討する。発話を、すべての相手に対して {理由} で終えるジャワ語・タイ語と、目上の疎遠な相手に対しては {詫び} で、それ以外の相手に対しては {理由} で終えるインドネシア語は、ともにネガティブ・ポライトネスが多用される言語だと言えよう。一方、マレーシア語は

同等の親しい相手に対しては {関係維持} が使われ、それ以外の相手に対しては {理由} が使われるので、ネガティブ・ポライトネスを基本としながらポジティブ・ポライトネスを志向する傾向が認められる。ネガティブ・ポライトネスの傾向が強いジャワ語とタイ語には敬語があるのに対して、ポジティブ・ポライトネスの傾向が認められるマレーシア語には敬語がない。よって、敬語体系の有無とポライトネスの傾向に何らかの関係があると考える伊藤(2005c)を支持する結果となった。

第1章第2節で先行研究を概観したように、伊藤(2005c)は依頼に対する断り行為の分析であった。他方、本稿は勧誘に対する断り行為の分析である。よって、先行発話行為が依頼行為・勧誘行為と異なっても、敬語体系の有無とポライトネスの傾向との関係は、同様のあり方を示すことが見出せた。

ただし、言語学的にはマレーシア語と同種と看做されているインドネシア語にネガティブ・ポライトネスが用いられており、解釈に整合性がないと指摘されるかもしれないが、このことについては本稿の調査がジャワ島中部ジャワ州の州都スマラン(Semarang)で行われたことが起因していると考えられる。第1章第1節で述べたように、ジャワ語は宮廷を中心とするジャワ文化を反映しており、日本語以上に複雑な敬語体系がある。宮廷は中部ジャワのジョクジャカルタ(Jogyakarta)にあり、スマランからの距離はさほどないことから⁹⁾、中部ジャワのインドネシア人は母語がインドネシア語であっても生まれ育った地のジャワ文化の素養や礼儀作法を知らず知らずのうちに身に付けているのであろう。ジャワ島ではインドネシア語とジャワ語の安定した二言語併用状態が形成されて存在していると、最近の研究においても報告がある(ベルウッド 2008、309頁)。

まとめ

本稿は、勧誘に対するジャワ語・インドネシア語・マレーシア語・タイ語の断り行為を、発話の順序の観点から検討した。その結果、応答の順序の最頻出パターンは、ジャワ語とインドネシア語では全場面で {詫び} {理由}、マレーシア語は目上の相手に対しては {詫び} {理由}、同等の親しい

断り表現を構成する発話の順序

相手に対しては {詫び} {理由} {関係維持}、同等の疎遠な相手に対しては {詫び} {理由} {理由}、タイ語は相手との親疎関係に関わりなく、目上の相手の場合は {理由} {詫び}、同等の相手の場合は {結論} {理由} であった。また、応答の最後に来る意味公式に、ジャワ語・インドネシア語・タイ語はネガティブ・ポライトネス、マレーシア語はポジティブ・ポライトネスの傾向が認められた。

敬語を持つ言語は語彙セットの中から相手や状況に応じた言葉を選ぶことができるので、その選択を誤らなければ大きな問題は生じないが、敬語を持たない言語は音調や垣根表現 (hedge) などで相手に失礼にならない言い方を選択することは可能であるものの、言葉それ自体の選択により社会言語的に最も適した待遇レベルを表現することはアプリアリではない。そこで、敬語体系を有する言語は敬語を用いて相手との距離を置くことで丁寧さを表現するネガティブ・ポライトネスを志向し、敬語体系を有しない言語は相手に積極的に働きかけることで丁寧さを表現するポジティブ・ポライトネスを志向するのではないか。

上述の敬語体系の有無とポライトネス・ストラテジーとの関係性は、マライ・ポリネシア語族に属するジャワ語・インドネシア語・マレーシア語に見られただけでなく、シナ・チベット語族に属するタイ語にも同様に確認できたので、ある程度の普遍性が認められる言語現象、事象と捉えられよう。

マレー語として同種であるインドネシア語とマレーシア語は、ポライトネス・ストラテジーも同じ傾向を示すと予想されたが、本稿のデータではインドネシア人とマレーシア人でポライトネス・ストラテジーが分かれた。これは、本稿が調査を行った場所がジャワ語の標準語地域と近かったため、ジャワ語の社会文化的規範 (socio-cultural norm) がインドネシア語母語話者に影響を与えたためと考えられる。Hofstede の文化理論に関しては、インドネシア語のデータの採取地が適切だったとは言えないため、正確な検討は難しい。

本稿の限界として、データ採取地の妥当性を挙げなければならないだろう。マレーシアとタイに関してはそれぞれの首都、クアラルンプール

(Kuala Lumpur) とバンコク (Bangkok) で調査を行ったが、インドネシアについてはジャワ島内ではあるがジャカルタ (Jakarta) ではなくスマランで実施したので¹⁰⁾、偏った資料となった嫌いは否定できない。

今後の課題として、ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語・タイ語におけるポライトネス・ストラテジーの使い分けが、本稿が分析対象としたデータ以外でも同じように現れるか、さらなる探究を総合的に行っていきたい。また、機会があれば、ジャカルタでデータを採取して再分析を試みたい。

付記

本稿は 2007 年度下関市立大学特定奨励研究費、2008 年度下関市立大学特定奨励研究費、および平成 20～22 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「東南アジアの言語のポライトネス——タイ語の場合」 (課題番号: 20520475) の助成を受けて行った研究成果の一部である。研究推進に際し、ご協力くださったディポネゴロ大学・マラヤ大学・タイ商工会議所大学の先生と学生の皆様に心よりお礼を申し上げます。また、貴重なコメントをくださった神田外語大学異文化コミュニケーション研究所紀要査読委員の先生方にも感謝の意を表す。

注

- 1) かつてはマラヨ・ポリネシア語族と称されていた (ベルウッド 1989、144 頁)。
- 2) 600 以上の言語が存在すると言われている (クルマス 1993、424 頁)。
- 3) 1969 年 5 月 13 日に起こったマレー人と華人間の大規模な民族暴動である。
- 4) 熊井 (1992) は母語別に比較を行っていないので、ここでは省く。
- 5) 宇佐美 (2008、19–20 頁) は、“positive face” “negative face” を「ポジティブ・フェイス」「ネガティブ・フェイス」と表記してきたが、同じ意味を表す “positive face want” “negative face want” のほうが「欲求」であることを強調してわかりやすいかもしれないと述べている。
- 6) 学生 (回答者) のクラスで授業を担当していない先生を指す。担任の先生に比べて、担当以外の先生は学生にとって社会的距離があり疎遠な存在である。
- 7) ブミプトラ政策 (Bumiputera Policy) により、調査を行ったマラヤ大学にはマレー系の学生が優先的に入学を許可される (杉本 1985)。優先入学の対象に含まれるオラン・アスリ (Orang Asli) はキリスト教徒なので、フェイス・シートを参考にしてイスラームのマレー語母語話者のみを有効回答とした。
- 8) DCT は自然発話に比べれば会話の不自然さはあるものの、変数のコント

断り表現を構成する発話の順序

ロールが可能な点とデータを多量に収集できる点において、極めて現実性の高い方法である。また、自然発話と DCT を比較した方法論研究では、断り行為の典型的な例は DCT から採取できると報告がある (Beebe and Cummings, 1996, pp. 80–81)。さらに、6 種類のデータ収集の方法を統計的に検討した研究では、DCT はデータの信頼性が非常に高く、発話の収集手段として有効であると結論付けられてもいる (Yamashita, 1996, p. 77)。

- 9) 調査終了後、筆者はディポネゴロ大学アセアン学生協会の学生の方にジョクジャカルタを案内してもらったが、現地の乗合バスでスマランからジョクジャカルタまで数時間だった。
- 10) 調査を行った 1999 年 8 月のインドネシアは、その前年 5 月にスハルト (Suharto) 体制が崩壊した後の第 3 代ハビビ (B. J. Habibie) 大統領の政権下で、政治的に混乱しており、ジャカルタ中心部は連日反政府デモが勃発していた。日本国政府からジャワ島への渡航自粛が勧告されており、インドネシアに入国したものの首都ジャカルタで十分な調査は望めなかった。

参考文献

【日本語文献】

- 赤木 攻 (1989) 『タイの政治と文化——剛と柔』 勁草書房。
- 綾部恒雄 (1982) 「民族と言語」 綾部恒雄・永積昭 編 『もっと知りたいタイ』 (79–104 頁) 弘文堂。
- 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」 『月刊言語』 26–6 号、66–71 頁。
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー——『断り』という発話行為について」 『日本語教育』 79 号、41–52 頁。
- 伊藤恵美子 (2001a) 「ポライトネス理論の実証的考察——心理的負担の度合を中心に意味公式の数値の観点から」 『日本語教育論集』 (国立国語研究所日本語教育センター) 17 号、1–20 頁。
- (2001b) 「マレーシア政府派遣留学生の対人コミュニケーション障害——言語行動を面接から分析して」 『異文化コミュニケーション研究』 (愛知淑徳大学) 4 号、57–70 頁。
- (2002a) 「マレー語母語話者の語用的能力と滞日期間の関係について——勧誘に対する『断り』行為に見られる工学系ブミプトラのポライトネス」 『日本語教育』 115 号、61–70 頁。
- (2002b) 「マレー語母語話者の中間言語に見られる語用的特徴——断り表現における普遍性と特殊性」 『ことばの科学』 (名古屋大学言語文化研究会) 15 号、179–195 頁。
- (2003a) 「なぜマレー語母語話者は断らないのか? ——アンケート調査とフォローアップ・インタビューから分析して」 『ことばと人間』 (横浜「言語と人

- 間」研究会) 4号、49-59頁。
- (2003b) 「勧誘行為に対する断り方の選択をめぐって——『マレー・ジレンマ』の検証」『言語文化学会論集』21号、75-84頁。
- (2004a) 「マレー語母語話者のポライトネスの諸相——勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から」名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士論文(未公刊)。
- (2004b) 「マレー語母語話者の断り表現における語用的特徴——依頼行為に対する返答を主に検討して」『ククロス——国際コミュニケーション論集』(名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻) 1号、1-16頁。
- (2004c) 「依頼に対するジャワ語・インドネシア語の断り行為——そこに現れたポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネス」『言語文化学会論集』23号、109-118頁。
- (2004d) 「断り場面で認められたジャワ語・インドネシア語の表現——Hofstedeの指標から解釈して」『東アジア言語研究』(東アジア言語学会) 7号、19-29頁。
- (2005a) 「勧誘に対するジャワ語・インドネシア語の断り行為：発話の順序に注目して」『ククロス——国際コミュニケーション論集』2号、37-49頁。
- (2005b) 「マレー語文化圏における断り表現の比較——ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の発話の順序に関して」『国際開発研究フォーラム』29号(名古屋大学大学院国際開発研究科)、15-27頁。
- (2005c) 「体系としての敬語を持たない言語は丁寧さをどう表現するのか? ——断り表現におけるジャワ語とインドネシア語」『ことばと人間』5号、11-20頁。
- (2008) 「マレー語母語話者の依頼に対する返答——日本語の習得過程を探る試み」『異文化コミュニケーション研究』(神田外語大学異文化コミュニケーション研究所) 20号、1-19頁。
- 宇佐美まゆみ(2002) 「相対的ポライトネスを捉える『ディスコース・ポライトネス理論』と言語教育」日本言語文化教育学会定例シンポジウム「ディスコース・ポライトネスと『待遇コミュニケーション』教育」資料。
- (2008) 「ポライトネス理論研究のフロンティア——ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11-1号、4-22頁。
- 岡本真一郎(2006) 『ことばの心理学〔第3版〕』ナカニシヤ出版。
- 小野沢純(1997) 「マレーシアの言語と文化」小野沢純 編『ASEANの言語と文化』(167-195頁) 高文堂出版社。
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 編(1989) 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』三省堂。
- 編(1995) 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編(上)』三省堂。

断り表現を構成する発話の順序

- 編 (1992) 『言語学大辞典 第4巻 世界言語編 (下-2)』三省堂。
- 河部利夫 (1976) 『タイ——その変動の中で』泰流社。
- 熊井浩子 (1992) 「留学生に見られる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』11-12号、72-80頁。
- クルマス、F. (山下公子 訳) (1987) 『国語と国家——言語計画ならびに言語政策の研究』岩波書店。
- (諏訪功・菊池雅子・大谷弘道 訳) (1993) 『ことばの経済学』大修館書店。
- 崎山 理 (1974) 「ジャバ語の敬語」林四郎・南不二男 編『敬語講座 (8) 世界の敬語』(94-120頁) 明治書院。
- 杉本 均 (1985) 「マレー半島における民族教育政策」小林哲也・江淵一公 編『多文化教育の比較研究——教育における文化的同化と多様化』(259-286頁) 九州大学出版会。
- 正保 勇 (1998) 「マレーシア語」東京外国語大学語学研究所 編『世界の言語ガイドブック (2) (アジア・アフリカ地域)』(324-340頁) 三省堂。
- 田中忠治 (1981) 『新タイ事情 (上) ——タイ社会の論理』日中出版。
- 富田竹二郎 (1990) 『タイ日辞典 [改訂版]』養徳社。
- 鳥居 高 (1998) 「マハティールの国家・国民構想——特集にあたって」『アジア経済』39-5号、2-18頁。
- 橋元良明 (1992) 「間接的発話行為方略に関する異言語間比較」『日本語学』11-12号、92-101頁。
- 藤森弘子 (1994) 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー——『断り』行為の場合」『名古屋学院大学日本語・日本語教育論集』1号、1-19頁。
- 舟田京子 (1997) 「インドネシアの言語と文化」小野沢純 編『ASEANの言語と文化』(73-107頁) 高文堂出版社。
- ベルウッド、P. (長田俊樹・佐藤洋一郎 訳) (2008) 『農耕起源の人類史』京都大学学術出版会。
- (植木武・服部研二 訳) (1989) 『太平洋——東南アジアとオセアニアの人類史』法政大学出版局。
- 堀江インカピロム、プリアー (1995) 「依頼表現の対照研究——タイ語の依頼表現」『日本語学』14-11号、76-83頁。
- ・宇佐美まゆみ (1996) 「人間関係を表す言葉——(4) タイ語の敬語」『月刊日本語』9-12号、56-61頁。
- 任 炫樹 (2004) 「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6-2号、27-43頁。
- ルンティエラ、ワンウィモン (2004) 「タイ人日本語学習者の『提案に対する断り』表現における語用論的転移——タイ語と日本語の発話パターンの比較から」『日

本語教育』121号、46-55頁。

元 智恩 (2003) 「断りとして用いられた『ノダ』——ポライトネスの観点から」『計
量国語学』24-1号、1-18頁。

【外国語文献】

- Beebe, L. M., and Cummings, M. C. (1996). Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. IN: S. M. Gass, and J. Neu (Eds.), *Speech Acts Across Cultures*, 65-86. New York: Mouton de Gruyter.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., and Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. IN: Scarcella, Robin C., Andersen Elaine S., and Krashen, Stephen D. (Eds.) *Developing Communicative Competence in a Second Language*, 55-73. Rowley, MA: Newbury House.
- Blum-Kulka, S., and Olshtain, E. (1984). Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, 5. 196-213.
- Brown, P., and Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cowan, G., Drinkard, J., and MacGavin, L. (1984). The effects of target, age, and gender on use of power strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1391-1398.
- Hofstede, G. (1991). *Cultures and Organizations: Software of the Mind*. New York: McGraw-Hill.
- Instone, D. Major, B., and Bunker, B. B. (1983). Gender, self confidence, and social influence strategies: An organizational simulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 322-323.
- Takai, J., Cargile, A., and Wiemann, J. (2000). Situational and relational contexts of direct communication strategies: A cross-cultural comparison. *Convention of the National Communication Association, Seattle*, 1-32.
- Yamashita, S. O. (1996). *Six measures of JSL pragmatics*. Honolulu: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa.